



日本近代文學研究會編集

現代日本小說大系

第二十二卷

河出書房版

現代日本小說大系 第二十二卷

昭和二十五年四月五日 初版印刷
昭和二十五年四月十日 初版發行

著者 夏目漱石

發行者 東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
河出孝雄

東京都千代田區神田小川町三丁目八番地
日本近代文學研究會

編集者 荒正人

印刷者 橫濱市中區鑼澤二十九番地
土岐佐光

發行所

東京都千代田區
神田小川町三ノ八

株式會社

河出書房

會員番號A一〇一四番
電話 神田(26)三二七四番

目次

夏目漱石

こゝろ

上 先生と私

四

中 兩親と私

五九

下 先生と遺書

八七

道 草

一七五

解説 說（荒 正人）

三四七

夏
目
漱
石

道 二

、

草 ろ

上 先生と私

私は其人を常に先生と呼んでゐた。だから此處でもたゞ先生と書く丈で本名は打ち明けない。是は世間を憚る遠慮といふよりも、其方が私に取つて自然だからである。私には其人の記憶を呼び起すことに、すぐ「先生」と云ひたくなる。筆を執つても心持は同じ事である。餘所々しい頭文字杯はとても使ふ氣にならない。

私が先生と知り合になつたのは鎌倉である。其時私はまだ若々しい書生であつた。暑中休暇を利用して海水浴に行つた友達から是非來いといふ端書を受取つたので、私は多少の金を工面して、出掛る事にした。私は金の工面に二三日を費やした。所が私が鎌倉に着いて三日と経たないうちに、私を呼び寄せた友達は、急に國元から歸れといふ電報を受取つた。電報には母が病氣だからと斷つてあつた。けれども友達はそのを信じなかつた。友達はかねてから國元にゐる親達に勧まない結婚を強ひられてゐた。彼は現代の習慣からいふと結婚するにはあまり年が若過ぎた。それに肝心の當人が氣に入らなかつた。夫で夏休みに當然歸るべき所を、わざと避けて東京の近くで遊んでゐたのである。彼は電報を私に見せて何うしやうと相談をした。私には何うして可いかわからなかつた。けれども實際彼の母が病氣であるとすれば彼は固より歸るべき筈であつた。それで彼はとう／＼歸る事になつた。折角來た私は一人取り残された。

學校の授業が始まるにはまだ大分日數があるので、鎌倉に居つても可し、歸つても可いといふ境遇にゐた私は、當分元の宿に留まる覺悟をした。友達は中國のある資産家の

息子で金に不自由のない男であつたけれども、學校が學校なのと年が年なので、生活の程度は私とさう變りもしなかつた。従つて一人坊ちになつた私は別に恰好な宿を探す面倒も有たなかつたのである。

宿は鎌倉でも邊鄙な方角にあつた。玉突だのアイスクリームだのといふハイカラなものには長い暇を二つ越さなければ手が届かなかつた。車で行つても二十錢は取られた。けれども個人の別荘は其所此所にいくつでも建てられてゐた。それに海へは極近いので海水浴を遣るには至極便利な地位を占めてゐた。

私は毎日海へ這入りに出掛けた。古い燻ぶり返つた蘘葦の間を通り抜けて磯へ下りると、此邊にこれ程の都會人種が住んでゐるかと思ふ程、避暑に來た男や女で砂の上が動いてゐた。ある時は海の中が錢湯の様に黒い頭でごちやごちやしてゐる事もあつた。其中に知つた人を一人も有たない私も、斯ういふ賑やかな景色の中に裹まれて、砂の上に寐をせつて見たり、膝頭を波に打たして其所いらを跳ね廻るのは愉快であつた。

私は實に先生を此雜沓の間に見付出したのである。其時海岸には掛茶屋が二軒あつた。私は不圖した機會から其一

軒の方に行き慣れてゐた。長谷邊に大きな別荘を構へてゐる人と違つて、各自に専有の着換場を拵えてゐない此所いらの避暑客には、是非共斯うした共同着換所といった風なものが必要なのであつた。彼等は此所で茶を飲み、此所で休息する外に、此所で海水着を洗濯させたり、此所で鹹はゆい身體を清めたり、此所へ帽子や傘を預けたりするのである。海水着を持たない私にも持物を盜まれる恐れはあつたので、私は海へ這入る度に其茶屋へ一切を脱ぎ棄てる事にしてゐた。

二

私が其掛茶屋で先生を見た時は、先生が丁度着物を脱いで是从から海へ入らうとする所であつた。私は其時反對に濡れた身體を風に吹かして水から上つて來た。二人の間には目を遮る幾多の黒い頭が動いてゐた。特別の事情のない限り、私は遂に先生を見逃したかも知れなかつた。それ程濱邊が混雜し、それ程私の頭が放漫であつたにも拘はらず、私がすぐ先生を見付出したのは、先生が一人の西洋人を伴れてゐたからである。

其西洋人の優れて白い皮膚の色が、掛茶屋へ入るや否

や、すぐ私の注意を惹いた。純粹の日本の浴衣を着てゐた彼は、それを床几の上にすぼりと放り出した儘、腕組をして海の方を向いて立つてゐた。彼は我々の穿く猿股一つの外何物も肌に着けてゐなかつた。私には夫が第一不思議だつた。私は其二日前に由井が濱迄行つて、砂の上にしやがみながら、長い間西洋人の海へ入る様子を眺めてゐた。私の尻を卸した所は少し小高い丘の上で、其すぐ傍がホテルの裏口になつてゐたので、私の凝としてゐる間に、大分多くの男が鹽を浴びに出て來たが、いづれも胴と腕と股は出してゐなかつた。女は特更肉を隠し勝であつた。大抵は頭に護謨製の頭巾を被つて、海老茶や紺や藍の色を波間に浮かしてゐた。さういふ有様を目撃した許の私の眼には、猿股一つで濟まして皆なの前に立つてゐる此西洋人が如何にも珍らしく見えた。

彼はやがて自分の傍を顧りみて、其所にこゝんでゐる日本人に、一言二言何か云つた。其日本人は砂の上に落ちた手拭を拾ひ上げてゐる所であつたが、それを取り上げるや否や、すぐ頭を包んで、海の方へ歩き出した。其人が即ち先生であつた。

私は單に好奇心の爲に、竝んで濱邊を下りて行く二人の

後姿を見守つてゐた。すると彼等は眞直に渡の中に足を踏み込んだ。さうして遠淺の磯近くにわい／＼騒いでゐる多人數の間を通り抜けて、比較的廣々した所へ來ると、二人とも泳ぎ出した。彼等の頭が小さく見える迄沖の方へ向いて行つた。夫から引き返して又一直線に濱邊迄戻つて來た。掛茶屋へ歸ると、井戸の水も浴びずに、すぐ身體を拭いて着物を着て、さつさと何處へか行つて仕舞つた。

彼等の出て行つた後、私は矢張元の床几に腰を卸して烟草を吹かしてゐた。其時私はぼかんとしながら先生の事を考へた。どうも何處かで見た事のある顔の様に思はれてゐなかつた。然し何うしても何時何處で會つた人か想ひ出せずに仕舞つた。

其時の私は屈託がないといふより寧ろ無聊に苦しんでゐた。それで翌日も亦先生に會つた時刻を見計らつて、わざわざ掛茶屋迄出かけて見た。すると西洋人は來ないで先生一人麥藥帽を被つて遣つて來た。先生は眼鏡をとつて臺の上に置いて、すぐ手拭で頭を包んで、すた／＼濱を下りて行つた。先生が昨日の様に騒がしい浴客の中を通り抜けて、一人で泳ぎ出した時、私は急に其後が追ひ掛けたくなつた。私は淺い水を頭の上迄跳かして相當の深さの所迄來て其所

から先生を目標に拔手を切つた。すると先生は昨日と違つて、一種の弧線を描いて、妙な方向から岸の方へ歸り始めた。それで私の目的は遂に達せられなかつた。私が陸へ上つて雫の垂れる手を振りながら掛茶屋に入と、先生はもうちやんと着物を着て入違に外へ出て行つた。

三

私は次の日も同じ時刻に濱へ行つて先生の顔を見た。其次の日も亦同じ事を繰り返した。けれども物を云ひ掛ける機會も、挨拶をする場合も、二人の間には起らなかつた。其上先生の態度は寧ろ非社交的であつた。一定の時刻に超然として來て、また超然と歸つて行つた。周圍がいくら賑やかでも、それには殆んど注意を拂ふ様子が見えなかつた。最初一所に來た西洋人は其後丸で姿を見せなかつた。先生はいつでも一人であつた。

或時先生が例の通りさつさと海から上つて來て、いつもの場所に脱ぎ棄てた浴衣を着やうとすると、何うした譯か、其浴衣に砂が一杯着いてゐた。先生はそれを落すために、後向になつて、浴衣を二三度振つた。すると着物の下に置いてあつた眼鏡が板の隙間から下へ落ちた。先生は白

紺の上へ兵児帶を締めてから、眼鏡の失くなつたのに氣が付いたと見えて、急にそこいらを探し始めた。私はすぐ腰掛の下へ首と手を実ッ込んで眼鏡を拾ひ出した。先生は有難うと云つて、それを私の手から受取つた。

次の日私は先生の後について海へ飛び込んだ。さうして先生と一所の方角に泳いで行つた。二丁程沖へ出ると、先生は後を振り返つて私に話し掛けた。廣い蒼い海の表面に浮いてゐるものは、其近所に私等二人より外になかつた。さうして強い太陽の光が、眼の届く限り水と山とを照らしてゐた。私は自由と歡喜に充ちた筋肉を動かして海の中で躍り狂つた。先生は又ばかりと手足の運動を已めて仰向になつた儘浪の上に寐た。私も其眞似をした。青空の色がきら／＼と眼を射るやうに痛烈な色を私の顔に投げ付けた。「愉快ですわね」と私は大きな聲を出した。

しばらくして海の中で起き上がる様に姿勢を改めた先生は、「もう歸りませんか」と云つて私を促がした。比較的強い體質を有つた私は、もつと海の中で遊んでゐたかつた。然し先生から誘はれた時、私はすぐ「えゝ歸りませう」と快よく答へた。さうして二人で又元の路を濱邊へ引き返した。

私は是から先生と懇意になつた。然し先生が何處にあるかは未だ知らなかつた。

夫から中二日置いて丁度三日目の午後だつたと思ふ。先生と掛茶屋で出會つた時、先生は突然私に向つて、「君はまだ大分長く此所に居る積ですか」と聞いた。考へのない私は斯ういふ間に答へる丈の用意を頭の中に蓄えてゐなかつた。それで「何うだか分りません」と答へた。然しにやにや笑つてゐる先生の顔を見た時、私は急に極りが悪くなつた。「先生は？」と聞き返さずにはゐられなかつた。是が私の口を出た先生といふ言葉の始りである。

私は其晩先生の宿を尋ねた。宿と云つても普通の旅館と違つて、廣い寺の境内にある別荘のやうな建物であつた。其所に住んでゐる人の先生の家族でない事も解つた。私が先生々々と呼び掛けるので、先生は苦笑ひをした。私はそれが年長者に對する私の口癖だと云つて辯解した。私は此間の西洋人の事を聞いて見た。先生は彼の風變りの所や、もう鎌倉にゐない事や、色々の話をした末、日本人にさへあまり交際を有たないのに、さういふ外國人と近付になつたのは不思議だと云つたりした。私は最後に先生に向つて、何處かで先生を見たやうに思ふけれども、何うしても

思ひ出せないと云つた。若い私は其時暗に相手も私と同じ様な感じを有つてゐはしまいかと疑つた。さうして腹の中で先生の返事を豫期してかゝつた。所が先生はしばらく沈吟したあとで、「何うも君の顔には見覺がありませんね。人違ひやないですか」と云つたので私は變に一種の失望を感じた。

四

私は月の末に東京へ歸つた。先生の避暑地を引き上げたのはそれよりずつと前であつた。私は先生と別れる時に、「是から折々御宅へ伺つても宜い（よ）さんすか」と聞いた。先生は單簡にたゞ「えゝ入らつしやい」と云つた丈であつた。其時分の私は先生と餘程懇意になつた積であつたので、先生からもう少し濃かな言葉を豫期して掛つたのである。それで此物足りない返事が少し私の自信を傷めた。

私は斯ういふ事でよく先生から失望させられた。先生はそれに氣が付いてゐる様でもあり、又全く氣が付かない様でもあつた。私は又輕微な失望を繰り返しながら、それがために先生から離れて行く氣にはなれなかつた。寧ろそれとは反對で、不安に揺かされる度に、もつと前へ進みた

なつた。もつと前へ進めば、私の豫期するあるものが、何時か眼の前に満足に現はれて来るだらうと思つた。私は若かつた。けれども凡ての人間に對して、若い血が斯う素直に働かうとは思はなかつた。私は何故先生に對して丈斯んな心持が起るのか解らなかつた。それが先生の亡くなつた今日になつて、始めて解つて來た。先生は始めから私を嫌つてゐたのではなかつたのである。先生が私に示した時々素氣ない挨拶や冷淡に見える動作は、私を遠けやうとする不快の表現ではなかつたのである。傷ましい先生は、自分に近づかうとする人間に、近づく程の價値のないものだから止せといふ警告を與へたのである。他の懐かしみに應じない先生は、^{おと}他を輕蔑する前に、まづ自分を輕蔑してゐたものと見える。

私は無論先生を訪ねる積で東京へ歸つて來た。歸つてから授業の始まる迄にはまだ二週間の日數があるので、其うちに一度行つて置かうと思つた。然し歸つて二日三日と經つうちに、鎌倉に居た時の氣分が段々薄くなつて來た。さうして其上に彩られる大都會の空氣が、記憶の復活に伴ふ強い刺激と共に、濃く私の心を染め付けた。私は往來で學生の顔を見るたびに新しい學年に對する希望と緊張とを

感じた。私はしばらく先生の事を忘れた。

授業が始まつて、一ヶ月ばかりすると私の心に、又一種の弛みが出來てきた。私は何だか不足な顔をして往來を歩き始めた。物欲しさうに自分の室の中を見廻した。私の頭には再び先生の顔が浮いて出た。私は又先生に會ひたくなつた。

始めて先生の宅を訪ねた時、先生は留守であつた。二度目に行つたのは次の日曜だと覺えてゐる。晴れた空が身に沁み込むやうに感ぜられる好い日和であつた。其日も先生は留守であつた。鎌倉にゐた時、私は先生自身の口から、何時でも大抵宅にゐるといふ事を聞いた。寧ろ外出嫌ひだといふ事も聞いた。二度來て二度とも會へなかつた私は、其言葉を思ひ出して、理由もない不滿を何處かに感じた。

私はすぐ玄關先を去らなかつた。下女の顔を見て少し躊躇して其所に立つてゐた。此前名刺を取次いだ記憶のある下女は、私を待たして置いて又内へ這入つた。すると奥さんらしい人が代つて出て來た。美しい奥さんであつた。

私は其人から鄭寧に先生の出先を教へられた。先生は例月其日になると雜司ヶ谷の臺地にある或佛へ花を手向けに行く習慣なのださうである。「たつた今出た許りで、十分

になるか、ならないかで御座います」と奥さんは氣の毒さうに云つて呉れた。私は會釋して外へ出た。賑かな町の方へ一丁程歩くと、私も散歩がてら雜司ヶ谷へ行つて見る氣になつた。先生に會へるか會へないかといふ好奇心も動いた。夫ですぐ踵を回らした。

五

私は墓地の手前にある苗畠の左側から這入つて、兩方に楓を植ゑ付けた廣い道を奥の方へ進んで行つた。すると其端れに見える茶店の中から先生らしい人がふいと出て來た。私は其人の眼鏡の縁が日に光る迄近く寄つて行つた。さうして出拔けに「先生」と大きな聲を掛けた。先生は突然立ち留まつて私の顔を見た。

「何うして……、何うして……」

先生は同じ言葉を二遍繰り返した。其言葉は森閑とした晝の中に異様な調子をもつて繰り返された。私は急に何とも應へられなくなつた。

「私の後を跟けて來たのですか。何うして……」

先生の態度は寧ろ落付いてゐた。聲は寧ろ沈んでゐた。けれども其表情の中には判然云へない様な一種の曇があつた。

た。

私は私が何うして此所へ來たかを先生に話した。

「誰の墓へ参りに行つたか、妻が其人の名を云ひましたか」

「いゝえ、其んな事は何も仰しやいけません」

「さうですか。——さう、夫は云ふ筈がありませんね、始めて會つた貴方に。いふ必要がないんだから」

先生は漸く得心したらしい様子であつた。然し私には其意味が丸で解らなかつた。

先生とは通へ出やうとして墓の間を抜けた。依撒伯拉何々の墓だの、神僕ロギンの墓だのといふ傍に、一切衆生悉有佛生と書いた塔婆などが建てゝあつた。全權公使何々といふのもあつた。私は安得烈と彫り付けた小さい墓の前で、「是は何と讀むんでせう」と先生に聞いた。「アンドレ」でも讀ませる積りでせうね」と云つて先生は苦笑した。先生は是等の墓標が現はす人種々の様式に對して、私程に滑稽もアイロニーも認めてないらしかつた。私が丸い墓石だの細長い御影の碑だのを指して、しきりに彼は云ひたがるのを、始めのうちは黙つて聞いてゐたが、仕舞に「貴方は死といふ事實をまだ眞面目に考へた事がありません

ね」と云つた。私は黙つた。先生もそれぎり何とも云はなくなつた。

墓地の區切り目に、大きな銀杏が一本空を隠すやうに立つてゐた。其下へ來た時、先生は高い梢を見上げて、「もう少しすると、綺麗ですよ。此木がすっかり黄葉して、ここの地面は金色の落葉で埋まるやうになります」と云つた。先生は月に一度づゝは必ず此木の下を通るのであつた。

向ふの方で凸凹の地面をならして新墓地を作つてゐる男が、鍬の手を休めて私達を見てゐた。私達は其所から左へ切れてすぐ街道へ出た。

是から何處へ行くといふ目的のない私は、たゞ先生の歩く方へ歩いて行つた。先生は何時もより口數を利かなかつた。それでも私は左程の窮窮を感じなかつたので、ぶらぶら一所に歩いて行つた。

「すぐ御宅へ御歸りですか」

「えゝ別に寄る所もありませんから」

二人は又黙つて南の方へ坂を下りた。

「先生の御宅の墓地はあすこにあるんですか」と私が又口を利き出した。

「いゝえ」

「何方の御墓があるんですか。——御親類の御墓ですか」

「いゝえ」

先生は是以外に何も答へなかつた。私も其話はそれぎりにして切り上げた。すると一町程歩いた後で、先生が不意に其所へ戻つて來た。

「あすこには私の友達の墓があるんです」

「御友達の御墓へ毎月御参りをなさるんですか」

「さうです」

先生は其日は以外を語らなかつた。

六

私はそれから時々先生を訪問するやうになつた。行くたびに先生は在宅であつた。先生に會ふ度數が重なるに伴つて、私は益々先生の玄關へ足を運んだ。

けれども先生の私に對する態度は初めて挨拶をした時も、惡意になつた其後も、あまり變りはなかつた。先生は何時も静であつた。ある時は静過ぎて淋しい位であつた。

私は最初から先生には近づき難い不思議があるやうに思つてゐた。それでゐて、何うしても近づかなければ居られな

いといふ感じが、何處かに強く働いた。斯ういふ感じを先生に對して有つてゐたものは、多くの人のうちで或は私だけかも知れない。然し其私丈には此直感が後になつて事實の上に證據立てられたのだから、私は若々しいと云はれても、馬鹿氣でゐると笑はれても、それを見越した自分の直覺を、とにかく頼もしく又嬉しく思つてゐる。人間を愛し得る人、愛せずにはゐられない人、それでゐて自分の懷に入らうとするものを、手をひろげて抱き締める事の出来ない人、——是が先生であつた。

今云つた通り先生は始終靜かであつた。落付いてゐた。けれども時として變な曇りが其顔を横切る事があつた。窓に黒い鳥影が射すやうに。射すかと思ふと、すぐ消えるには消えたが、私が始めて其曇りを先生の眉間に認めたのは、雜司ヶ谷の墓地で、不意に先生を呼び掛けた時であつた。私は其異様の瞬間に、今迄快よく流れてゐた心臓の潮流を一寸鈍らせた。然しそれは單に一時の結滞に過ぎなかつた。私の心は五分と經たないうちに平素の彈力を回復した。私はそれぎり暗さうなこの雲の影を忘れてしまつた。ゆくりなくまた夫を思ひ出させられたのは、小春の盡きるに間のない或る晩の事であつた。

先生と話してゐた私は、不圖先生がわざ／＼注意して呉れた銀杏の大樹を眼の前に想ひ浮べた。勘定して見ると、先生が毎月例として墓參に行く日が、それから丁度三日目に當つてゐた。其三日目は私の課業が午で終る樂な日であつた。私は先生に向つて斯う云つた。

「先生雜司ヶ谷の銀杏はもう散つて仕舞つたでせうか」
「まだ空坊主にはならないでせう」

先生はさう答へながら私の顔を見守つた。さうして其所からしばし眼を離さなかつた。私はすぐ云つた。

「今度御墓參りに入らつしやる時に御伴をしても宜ござんすか。私は先生と一所に彼所いらが散歩して見たい」

「私は墓參りに行くんで、散歩に行くんぢやないですよ」
「然し序でに散歩をなすつたら丁度好いぢやありませんか」

先生は何とも答へなかつた。しばらくしてから、「私の本當の墓參り丈なんだから」と云つて、何處迄も墓參と散歩を切り離さうとする風に見えた。私と行きたくない口實だか何だか、私には其時の先生が、如何にも子供らしくて變に思はれた。私はなほと先へ出る氣になつた。

「ぢや御墓參りでも好いから一所に伴れて行つて下さい。」

私も御墓参りをしますから」

實際私には墓参と散歩との區別が殆んど無意味のやうに思はれたのである。すると先生の肩がちよつと曇つた。眼のうちに異様の光が出た。それは迷惑とも嫌惡とも畏怖とも片付けられない微かな不安らしいものであつた。私は忽ち雜司ヶ谷で「先生」と呼び掛けた時の記憶を強く思ひ起した。二つの表情は全く同じだつたのである。

「私は」と先生が云つた。「私はあなたに話す事の出來ないある理由があつて、他と一所にあすこへ墓参りには行きたくないのです。自分の妻さへまだ伴れて行つた事がないのです」

七

私は不思議に思つた。然し私は先生を研究する氣で其宅へ出入りをするのではなかつた。私はたゞ其儘にして打過ぎた。今考へると其時の私の態度は、私の生活のうちで寧ろ嫌むべきものの一つであつた。私は全くそのために先生と人聞らしい溫かい交際が出来たのだと思ふ。もし私の好奇心が幾分でも先生の心に向つて、研究的に働らき掛けたなら、二人の間を繋ぐ同情の糸は、何の容赦もなく其時ふ

つりと切れて仕舞つたらう。若い私は全く自分の態度を自覺してゐなかつた。それだから尊いのかも知れないが、もし間違へて裏へ出たとしたら、何んな結果が二人の仲に落ちて來たらう。私は想像してもぞつとする。先生はそれだけでなく、冷たい眼で研究されるのを絶えず恐れてゐたのである。

私は月に二度若くは三度づゝ必ず先生の宅へ行くやうになつた。私の足が段々繁くなつた時のある日、先生は突然私に向つて聞いた。

「あなたは何でさう度々私のやうなものの宅へ遣つて來るのですか」

「何でと云つて、そんな特別な意味はありません。——然し御邪魔なんですか」

「邪魔だとは云ひません」

成程迷惑といふ様子は、先生の何處にも見えなかつた。

私は先生の交際の範圍の極めて狭い事を知つてゐた。先生の元の同級生などで、其頃東京に居るものは殆んど二人か三人しかないといふ事も知つてゐた。先生と同郷の學生などには時たま座敷で同座する場合もあつたが、彼等のいづれもは皆な私程先生に親しみを有つてゐないやうに見受け

られた。

「私は淋しい人間です」と先生が云つた。「だから貴方の來て下さる事を喜んでゐます。だから何故さう度々來るのかと云つて聞いたのです」

「そりや又何故です」

私が斯う聞き返した時、先生は何とも答へなかつた。ただ私の顔を見て「あなたは幾歳ですか」と云つた。

此間答は私に取つて頗る不得要領のものであつたが、私は其時底迄押さずに歸つて仕舞つた。しかも夫から四日と経たないうちに又先生を訪問した。先生は座敷へ出るや否や笑ひ出した。

「又來ましたね」と云つた。

「えゝ來ました」と云つて自分も笑つた。

私は外の人から斯う云はれたら屹度癢に觸つたらうと思ふ。然し先生に斯う云はれた時は、丸で反對であつた。癢に觸らない許でなく却つて愉快だつた。

「私は淋しい人間です」と先生は其晩又此間の言葉を繰り返した。「私は淋しい人間ですが、ことによると貴方も淋しい人間ぢやないですか、私は淋しくつても年を取つてゐるから、動かずにゐられるが、若いあなたは左右は行かな

いでせう。動ける丈動きたいのでせう。動いて何かに打つかりたいのでせう。……」

「私はちつとも淋しくはありません」

「若いうち程淋しいものはありません。そんなら何故貴方はさう度々私の宅へ來るのですか」

此所でも此間の言葉が又先生の口から繰り返された。

「あなたは私に會つても恐らくまだ淋しい氣が何處かでしてゐるでせう。私にはあなたの爲に其淋しさを根元から引き抜いて上げる丈の力がないんだから。貴方は外の方を向いて今に手を廣げなければならなくなります。今に私の宅の方へは足が向かなくなります」

先生は斯う云つて淋しい笑ひ方をした。

八

幸にして先生の豫言は實現されずに濟んだ。経験のない當時の私は、此豫言の中に含まれてゐる明白な意義さへ了解し得なかつた。私は依然として先生に會ひに行つた。其内いつの間にか先生の食卓で飯を食ふやうになつた。自然の結果奥さんとも口を利かなければならぬやうになつた。